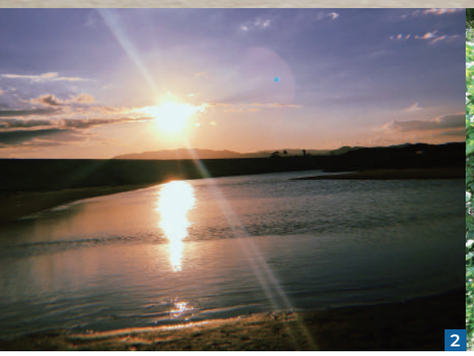
福島浜通りシネマプロジェクト

Fukushima Hamadori Cinema Project 2022



1 アートの力で人々の心に火を灯す――そんな思いから双葉町に壁画を描かせて欲しいと、双葉町の元住民にお願いし2020年８月にスタートした壁画アート集団、OVER ALLsのプロジェクト「FUTABA Art District」。以後、街中に壁画は増え続けている。双葉町駅前には３つの壁画が一望できる。2 太平洋を臨む海岸。3 小さな森の中に佇む神山神社。青々とした木々が美しい。4 双葉町のシンボル「双葉ダルマ」。毎年１月には「双葉ダルマ市」が開催、震災以降も途絶えることなく続いている。双葉ダルマは２種類あり、写真のダルマは顔縁に町章が描かれた「町章ダルマ」。もう一つは青縁が特徴の「太平洋ダルマ」。

Fukushima Hamadori Cinema Project 2022

「福島浜通りシネマプロジェクト」概要

2011年３月11日に発生した東日本大震災で、甚大な被害を受けた福島県浜通り地区。10年以上が経過した今、避難指示区域の解除も徐々に進み、政府は地域住民の生業の再建や企業誘致に着手し始めている。

一方で、地域住民の心に潤いを与えるべく、芸術・文化を通じた地域活性化のイベントとして、「福島浜通りシネマプロジェクト」を映画24区にて企画。具体的には、映画や演劇で新たな彩りを地域にもたらし、その魅力に惹かれる若者たちが集う流れを作っていきたい――。

そんな想いから、まずは映画や演劇界の第一線で活躍する映画監督や俳優を福島浜通り地域に招聘。地元市民や全国から集まってきた子どもたちと共に、映画というモノづくりに触れることで、将来のまちづくりを考えるきっかけにつながっていければ、と。

と同時に、世界に負けない作品づくりに向けて、働く人々の環境面や人材育成面などにも積極的に目を向ける。それが結果的には、福島浜通り地域の魅力発信と、映像文化産業の課題改善を掛け合わせた地域発展になるのではないだろうか。

そのモデル例になるべく、2022年夏、「福島浜通りシネマプロジェクト」は開催された。

表紙イラスト＝向田優

現場進行でもある僕はロケハン後すぐにペンを握る。「子ども（クルー）たちはあの場所でこんな表情をするのかなあ。こういうやりとりをするのかなあ」と思いながら絵を描いた。現場で見た一人ひとりの表情は清々しく、時にもがき、楽しもう、という姿は何よりも素敵で。３つの作品、それぞれの出逢いは絵には表せないほど、価値あるカタチでした。

ごあいさつ

本パンフレットをご覧いただきありがとうございます。

経済産業省では、東日本大震災以降福島県において一歩ずつ復興を積み重ねてきたところ、今年新たに、芸術・文化を通じ、新たな地域の独自性を創出する取り組み、「福島浜通り映像・芸術文化プロジェクト」を立ち上げました。

プロジェクトの第1弾として、まずは映画に着目し、震災から10年以上の長きにわたりすべての住民の避難が続いてきた双葉町において、今回のイベントを実施させていただきました。東京電力福島第一原子力発電所における事故の影響で今なお多くの方々が避難をされている中、全国の中高生の方々が双葉町を訪れ、思い思いに映画をゼロから作ってくださったこと、そしてつながりを育んでくださったことは、本格的な帰還が始まり今後一層の盛り上がりを迎えていくこの地域に新たな風を吹かせてくれました。携わっていただいたすべての方々に感謝申し上げます。

プロジェクトはまだ始まったばかりです。これからも浜通り地域にワクワクが溢れるような取り組みを、地元、県外、そして世界の方々と共に考え、進めて参ります。

福島浜通り
映像・芸術文化プロジェクト
若手チーム

ルポ

中高生 夏の映画づくり体験

映画芸術を活用した魅力あるまちづくり計画を中長期的に見据えた「福島浜通りシネマプロジェクト」。そのプレイベントとして、2022年夏、中高生たちが双葉町で映画づくり体験に挑戦。福島県内および全国から集まった21人の中高生たちが奮闘する姿をリポートする。

映画づくりは人づくり ものづくりに関わった自信が「まちづくり」の活力となる――

映画24区では、2011年の東日本大震災の直後、被害にあった宮城県南三陸町の小学6年生たちと修学旅行を兼ねた映画づくり体験を開催したことがあります。当時の参加者の中には震災で家族を亡くした子もいましたが、映画づくりを通じ、他者と触れていく中で、現実に負けず、前を向いて歩こうとする子どもたちの逞しい姿を垣間見たことを今でもはっきりと覚えています。それ以来、私は作品の優劣ではなく、映画づくりにかかわる時間そのものが人を大きく成長させる力があることを信じ、映画づくりを活用したさまざまな取り組みを全国の各地域で展開するようになりました。

なぜ映画づくりが人を育てるのか――。

本企画は、普段映画館のスクリーンで家族や友だちと何気なくみている映画を、ゼロの状態からロケ地をまわり、脚本を練り、撮影や編集をして、さらに4日後にはお客様を招いた上映会までやってしまう訳ですからとにかく大変な取り組みです。住んでいる地域も年齢も異なるメンバーですが、否応にも協力して、プロの大人たちとかかわり、前に進めないといけません。一見無謀のようにみえる企画ですが、この濃密な環境が子どもたちの内面に隠された力を存分に引き出してくれるのです。日々自信に満ち溢れていく子どもたちの姿はそれ自体が感動ですらあります。特にコロナにより他者との触れ合いを制限されてきた子どもたちにとっては特別な時間だったかもしれません。

昨今では、福島浜通り地域に限らず、全国の至るところでさまざまな「まちづくり」の取り組みが行われていますが、一番大切なことは、まちで育った子どもたちが自分たちのまちに誇りを持ち、自発的に未来のまちづくりにかかわりたいと思ってくれるような仕掛けを作ることだと考えています。映画24区ではそれを「映画づくり体験」を通じて貢献できれば幸いです。

今回、経産省の皆様と立ち上げた「福島浜通りシネマプロジェクト」は、東日本大震災復興から11年が経過し、いよいよ文化・芸術を活用した本格的なまちづくりが始まります。「夏の映画づくり体験」は序章に過ぎず、これから国が長期的視野で描くまちのグランドデザインに映画づくりを通じて継続・貢献したいという想いです。今後の展開にご期待ください。

三谷一夫(みたに・かずお)
㈱映画24区取締役社長。映画スクールを運営する傍ら、映画・ドラマ・CMなどの企画・制作および配給を手掛ける。近年は全国の自治体や地場企業と組んだ映画プロデュース企画や作品に数多く携わる。

「子ども映画づくり体験」in Futaba

福島県内および日本各地から集まった中高生たちが福島県浜通り地域・双葉町に4日間滞在。映画界の第一線で活躍するプロの映画監督、スタッフのサポートを受けながら、子どもたちだけで映画を完成させる。

2022年8月18～21日、双葉町周辺で行われた〈映画づくり体験〉はA～Cの3つのグループに分けられ、それぞれチームリーダーの映画監督、サブリーダーの若手映画監督を配置。さらにテクニカル・スタッフとして撮影、録音、編集などプロの技術スタッフ、映画24区およびグループ会社のスタッフ、地元からのボランティア・スタッフが参加し、サポートしていく。

1チーム7人、計21人がロケハン、脚本づくり、撮影、編集、ポスターづくり、上映と、映画づくりの全行程を体験する。制作する作品は5～10分。上映会には関係者ほか、地元の人も参加することができる。

リーダー&サブリーダー紹介

Aチーム

リーダー
永田琴

ながた・こと／大阪府出身。2004年「恋文日和」で商業デビュー。代表作は映画「シャンティ デイズ365日、幸せな呼吸」「いけいけ！バカオンナ～我が道を行け」、ドラマ作品は東野圭吾『分身』『変身』『片想い』、『東京ラブストーリー(2020)』『ライオンのおやつ』など。

サブリーダー
板野侑衣子

いたの・ゆいこ／同志社女子大学4年生。同大学院生ますだあやこと共同で監督した「魚の目」が22年に公開。第24回京都国際学生映画祭で最終審査員賞(行定勲賞)、第15回田辺・弁慶映画祭でキネマイスター賞を受賞。

Bチーム

リーダー
市井昌秀

いちい・まさひで／1976年生まれ、富山県出身。2006年に初の長篇作品「隼(はやぶさ)」が第28回ぴあフィルムフェスティバルにおいて準グランプリと技術賞のW受賞。代表作は「箱入り息子の恋」「ハルチカ」「台風家族」など。「犬も食わねどチャーリーは笑う」が22年に公開。

サブリーダー
金子由里奈

かねこ・ゆりな／2018年に映画「21世紀の女の子」公募枠に選出された「Projection」を監督。19年「散歩する植物」がぴあフィルムフェスティバル入選。21年「眠る虫」公開。「ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい」が23年公開。

Cチーム

リーダー
吉田康弘

よしだ・やすひろ／1979年生まれ、大阪府出身。同志社大学卒業。2007年、大竹しのぶが型破りな母を演じた「キトキト！」で監督デビュー。「旅立ちの島唄～十五の春～」「かぞくいろ RAILWAYS わたしたちの出発」など。NHK特集ドラマ『二十四の瞳』が22年に放送。

サブリーダー
東盛あいか

ひがしもり・あいか／地元の与那国島から京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)映画学科俳優コースに進学。主演・監督を務めた卒業制作作品「ばちらぬん」がぴあフィルムフェスティバル2021グランプリ受賞、22年全国公開。

スケジュール

	8.18(木)	8.19(金)	8.20(土)	8.21(日)
7:00		朝食	朝食	朝食
8:00		脚本づくり 撮影	撮影	編集& ポスターづくり 発表準備
9:00				
10:00				
11:00	オリエンテーション			
12:00	昼食	昼食	昼食	昼食
13:00	ロケハン 脚本づくり	撮影	撮影&編集	上映発表会 振り返り
14:00				
15:00				
16:00				
17:00				
18:00	夕食	夕食	夕食	
19:00	脚本づくり& 撮影準備	オリエンテーション	編集&オリエンテーション	
20:00				

DAY 1

子どもたちを迎えるスタッフも万全の体制で臨む

“オリエンテーション～チーム分け”

▶オリエンテーションは全体を統括する三谷一夫氏の挨拶からスタート。子どもたちが挑戦する映画づくりのテーマが「おはよう」「おやすみ」であることも発表された

◀参加者全員に配られたオリジナルTシャツ。名札と共にセッティングし、子どもたちの到着を待つばかり

▲チームワークを高めるために、各チームそれぞれ手始めの共同作業を行った。Aチーム（左）はお互いの顔をしっかり確認したいと、屋外でマスクを外してレクリエーション。Bチーム（右上下）は打ち解けるためのゲームを。Cチームは思いつくキーワードとホワイトボードに書き出した

▲ロケ地となる双葉町がどんな街なのか理解を深めるため、Aチームは東日本大震災・原子力災害伝承館に足を運んだ

▶子どもたちの殻を打ち破るべく、俳優スタッフの指導を受けながら発声練習

21人21様の子どもたち コミュニケーションでチーム力をアップ

福島県および日本全国から集まった中高生は21人。募集時には子どもたち以上に、大学生をはじめ、大人たちの問い合わせが多かったという。中には多めに滞在費を払うので参加させてほしいと、熱心にアプローチする人も少なくなかった。

だが、参加者はあくまでも中学1年生から高校3年生までの子どもたち。双葉町で生まれ育ち、5歳のときに避難し移住した子もいれば、住民ゼロの町を見てみたかったと、大阪から参加した子も。

また、子役として既に俳優活動を行っている子や、女優を目指しワークショップでレッスンを受けている子らがいる一方、親から面白そうなプロジェクトだと薦められ、仕方なく参加したと正直に話す子もいた。

オリエンテーションは復興の中枢を担う、産業交流センター1階の大会議室で開催。全員が初対面ということもあり、開講当初は誰もが緊張の面持ちだった。早速、区分けされたチームごとに子どもたちが自己紹介していく。だが、思春期特有の難しさかなかなか殻が打ち破れず、言葉は少なめ。

ただ、映画づくりは何よりもコミュニケーションが大事。まずは打ち解けることから始めようと、前の人の自己紹介を覚えて次の人に伝える他己紹介や、紙でタワーを作るゲーム、発声練習など、各チームそれぞれのオリエンテーションを行っていった。

機材講習会

チームごとのオリエンテーションがひと段落したところで、技術スタッフによる機材の講習会が行われた。講師は数多くの作品を手掛ける武村敏弘氏（撮影技師）、松野泉氏（録音・整音技師）。さらにテクニカル・スタッフがサポートし、各グループの説明にあたった。カメラ、マイク、結線など機材の説明から、芝居と呼吸を合わせた撮影のコツ、マイクのポジショニングなど、まさにプロ仕様。フレームの切り方、カットとシーンの違い、背景を生かした画、海や工事現場の音の録り方など具体的なワークショップに子どもたちも興味津々、真剣に臨んだ。

映画づくり講座

全体の合同オリエンテーションでは、映画がどのようにして作られるのか、その基礎を知っておこうと、永田琴監督による「映画づくり講座」を実施した。まず「映画づくりには正解はない」と、永田監督は「発言することを恐れるな」と提言。そして（企画）から（劇場公開・配信）までの間にはどんな作業があるのか、子どもたちに訊いた。すると（脚本）（キャスティング）など次々意見が飛び出し、ホワイトボードはすぐ埋まる勢い。さすが映画に関心の高い子どもたちが多いからだろう。その後、子どもたちによる映画づくりが本格スタートした。

映画上映イベント

「映画と地域」映画を活用したまちづくりの可能性を探る

「福島シネマプロジェクト」では中高生の〈映画づくり体験〉ほか、「映画×地域」「映画×人材育成」「映画×滞在制作」など、映画をキーワードにさまざまなテーマを設定。福島浜通り地域におけるまちづくりへの活用や、今後の可能性を検証するディスカッションの場を設けた。

第１部は「映画と地域」と題し、2008年より地方自治体が主体となって進める、映画24区による地方映画プロジェクト「ぼくらのレシピ図鑑」シリーズを地域活性の成功事例として紹介。兵庫県加古川市で製作された第１弾「36.8℃ サンジュウロクドハチブ」を上映した後、安田真奈監督、三谷一夫プロデューサー、兵庫県会議員の松本裕一氏をゲストに招き、トークディスカッションが行われた。

同シリーズのコンセプトは「１本の映画をつくり上げた時間（過程）が、地域にとってかけがえのない財産になる」。企画、脚本づくりから地元の人々にかかわってもらい、映画づくりのセミナーやワークショップ、オーディションを開催。シナリオ作りやロケハン、美術の準備、地元料理の開発、キャストオーディションを行うなど、まちづくりを視野に入れた新たな地方映画の形を提案する。

安田監督は「映画は終わらない祭り」と発言。そのお祭り効果は市民が参加した“自分たちの映画”として残ると語った。

現在、安田監督は山梨県富士吉田市と第３弾「メンドウな人々」を制作中。トークセッションには双葉町の住民も参加、地域と映画を結び付けまちづくりに生かす、自治体についての意見交換も行われた。

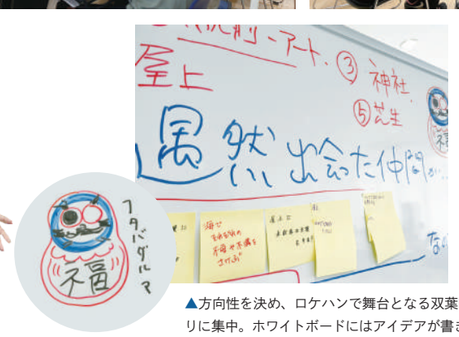
ぼくらのレシピ図鑑

DAY 2

“ロケハン～脚本づくり”

双葉町の姿が想像力を掻き立てる

▲時が3.11で止まってしまった小学校（左）。旧駅舎に再活用された憩いのスペースには双葉町を紹介するパネルなども展示（中央）。震災後も変わらない海岸（右）。何もない、これからまちづくりが始まる双葉町で、どんな作品をどういう手段で映画をつくるのか。刺激を受けた子どもたちの想像力が膨らむ



▲子どもたちは事前に映画づくりに役立ちそうな衣裳、小道具などをそれぞれ持参。それらも脚本づくりの重要なアイテムとして一役買った

▲方向性を決め、ロケハンで舞台となる双葉町を見て回った子どもたちは脚本づくりに集中。ホワイトボードにはアイデアが書き出され、物語が紡がれていく

双葉町を舞台に子どもたちのアイデアが埋め尽くされる

どんな作品を作りたいか。Aチームは「今の双葉町で3日間何をする?」「どんなことが気になる?」と投げかけた。一方、Bチームは「映画を教えようとしない」「よくある方法は提示するが、それを疑ってかかる」「多数決はいいが、少数派を排除しない」方針を発表。子どもたちが自主的に意見を出し合うまで、待ちの姿勢を貫いた。Cチームは一人の子が小道具として弾けないギターを持参してきたところから話が発展。そこから発想する物語を話し合った。

ある程度、方向性が決まったら次はロケハンへ。駅周辺、神社、廃校となった小学校、海など、舞台となる双葉町をチームごとに訪れ、さらに想像力を膨らませていく。小学校の鳥小屋に書かれていた文字に子どもたちが反応するなど、ロケハンで発見したものが、脚本づくりに大いに役立った。

ロケハンから戻ってきたら、撮ってきた写真をパソコンに映し出しアイデアを捻出。ホワイトボードは子どもたちの言葉でいっぱいに埋め尽くされていった。しかし、一本の脚本にするには相当の時間が必要だったようだ。

最終的には、Aチームは全員が出演し、カメラやマイクも1回ずつ担当。Bチームは一人1シーンを監督。Cチームはドラマ仕立ての脚本にし、俳優部と技術部の2班に分かれて撮ることにした。

※本地図は「双葉町の復興が見える地図」を基に再編集し作成　地図発行：双葉町

1 双葉駅／旧駅舎憩いのスペース

2 壁画アート

3 相馬妙見宮初發神社

4 東日本大震災・原子力災害伝承館

DAY3

“撮影”

機材はすべてプロ仕様。初めてのカチンコに手が震える

プロ顔負けの演出と妥協しない画づくり

脚本が固まったら、それをプリントアウトし、スタッフと共有。撮影プランを練っていく。その仕切りを行うのが本部スタッフの役割だ。現場進行の向田優氏を中心に、撮影を行うチームに撮影、録音のテクニカル・スタッフを配置。あわせてメイキング&オフィシャル撮影用スタッフが移動、車両のタイム・スケジュールを組んでいく。

まず、最初に会議室を飛び出したのはAチームだった。台本を確認すると、駅、駅前広場、集合住宅前、神山神社、産業交流センター、海と、ロケ地が多い。聞けば青春映画よろしく、双葉駅に降り立った子どもたちが偶然出会い、それぞれの思いの丈を叫ぶロードムービーを目指すという。

電車が入ってくるタイミングで撮影したいと、急きょ大移動。慌ただしく機材のセッティングが行われ、動きを確認した後すぐ本番。初シーンから子どもたちにとってはハードルの高い撮影となった。

ラストは子どもたちが海に向かって叫ぶのだが、「双葉が大好きだ――!」と叫んだ双葉町出身の橋本岳くんは感極まって号泣、スタッフの涙を誘った。その間、カメラは手持ちで順にフレームインする子どもたちを長回しで追う。容赦ない自主的なダメ出しにも、子どもたちは果敢に応え、何度も演じる姿がまた感動を呼んだ。

Bチームは7人がそれぞれ撮りたいシーンに挑むオムニバス形式ながら、一つの物語に仕立てた作品を目指す。それだけに、脚本には時間をかけ、撮影も一切の妥協なし。サポートを受け即席で作ったドリーや車両を使っての移動撮影、ブルーバックでぬいぐるみを撮影しCG加工するなど、初めてとは思えない高度な演出にも挑戦した。

映画好き、音楽好きの参加者も多く、シーンの説明に名作のタイトルがあがったり、クラリネットやダンスを取り入れたり、エンタテインメント性も十分。現場でも新たなアイデアが次々生まれ、先の見えない展開がまた現場を高揚させた。撮影は上映会ぎりぎりまでずれ込んだが、その達成感も得難い経験の一つになったことだろう。

Cチームは演技経験のある下松谷嘉音くん、川原菜摘さんがいたことから、ドラマ性の高い物語を発案。大薮桃子さんが一晩考え練り上げた脚本をたたき台に、恋愛経験の少ない中高生らしく、家族愛を描いた作品を目指す。

吉田康弘監督は撮影における専門用語を説明しながら撮影手法をいくつか提案。その中から子どもたちがベストのショットを決めていく。当初は遠慮がちだった子どもたちも、次第に思っていることをどんどん言い始めるように。物語のキーとなる手紙も、全員が文字を書いてみる自発的オーディションを実施。予定調和にならない演技の打ち合わせも堂に入っていった。それはまさに、プロと変わらない映画の現場だった。

▲青春劇を象徴するラストシーン。なかなか殻を打ち破れなかった子どもたちが大声で叫び、はしゃぐ姿にスタッフの涙腺は緩みっぱなし

▲駅前広場での撮影は初日。まだカメラもマイクも、演技もおぼつかないが、永田琴監督、武村敏弘撮影監督の指導の下、撮影を進めていく

Aチーム

▲クライマックスシーンに登場するこどもたちを、それぞれ交代しながら撮影。手持ちでそれぞれの表情を捉えていく

Bチーム

▲初日は海での撮影。このシーンの監督・主演を務めた今村優来さんは中学1年生。ダンスを踊り、自らダメ出しをしテイクを重ねた

▲産業センターでのショット（上）最終日にようやくクランクアップ。思わず全員拍手で労をねぎらった（下）

▲小学校での撮影ではフレームを確認しながらベストのポジショニングを探す（上）神社での撮影は日没後も粘って撮影。ユニークな画づくりに挑戦（下）

Cチーム

▲ギターケースから父の手紙を見つけ、兄妹で読むという感動のラストシーン。途中10分くらいか、雨に降られながら待っている間もそのテンションを持続させた

▲撮影班の子どもたちは黙々と、どんなカットがベストなのか、カメラを覗きながらポジショニングを決めていく。階段を上がっていくシーンは可能な限りローアングルにしたいとセッティング

食事

▲福島相双復興推進機構は地元の事業者、農業者に協力を仰ぎ、東京都内で日本料理の飲食店を運営する僖成がプロデュースした「福島の美味しい食」を提供。献立表も用意され、その豪華なもてなしに子どもたちのテンションは上がりっぱなし

▲双葉町には食事処がないため、産業交流センターにテナントを持つレストランのご協力でご当地メニューを用意。食欲旺盛な子どもたちも大満足

イベント

▲「福島浜通りシネマプロジェクト」が産業交流センターで開催されている中、アーティストのキャンドル・ジュン氏が東日本大震災後に被災地で行ってきた追悼イベント、キャンドルナイトが産業交流センターの屋外にて行われた。幻想的なロウソクの灯に託された人々の想い。子どもたちも復興への願いを込めたメッセージを記した

トークセッション

福島浜通りでの映画づくりを考える

中高生の〈映画づくり体験〉で完成した作品の上映会が行われる当日、産業交流センターでは「福島浜通りシネマプロジェクト」の一環としてトークセッションが開催。前日の第１部「ぼくらのレシピ図鑑」シリーズ好事例にみる映画を活用したまちづくり～「映画と地域」の上映会＆トークセッションに続き、第２部は犬童一心監督、本広克行監督を招き、「福島と映画の魅力」「双葉町・浜通りの将来を映画で考える」と、２つのテーマでディスカッションが行われた。

前半のトークショーには、福島県を舞台にした映画「フラガール」(06) に出演した南海キャンディーズのしずちゃんこと山崎静代さんも登壇。相方の山ちゃんこと山里亮太さんが司会を務めた。

犬童監督は「名付けようのない踊り」(21)「ハウ」(22) の撮影で双葉町、浪江町を訪れていたこともあり、福島には特別な想いがあるという。また、故郷・香川県を舞台にした「UDON」(06) や、さぬき映画祭のディレクターを務めるなど、映画でまちおこしに努めてきた本広監督はその経験を語るとともに、「撮影地に向いている」双葉町に惹かれた理由を挙げた。

最近、マラソンを始めたというしずちゃんは、双葉町をスポーツ開催地として推したいと提案。司会業には定評のある山ちゃんとの丁々発止の掛け合いで、会場の笑いを誘った。

後半はさらに一歩踏み込み、具体的な映画によるまちづくりについての意見交換が行われた。映画づくりは人材育成の場になること、撮影クルーが滞在することによって経済効果が生まれることなどから映画ロケ地の誘致、さらに撮影スタジオ設立についても話が及んだ。

東京国際映画祭でも先の犬童監督、本広監督はじめ、映画関係者を招いたトークセッションが開催。映画など芸術文化を通して、福島県浜通り地域に新たな魅力を創出する「福島シネマプロジェクト」の取り組みは、フィルムコミッションの立ち上げが検討されるなど、さらに実現に向け、確実に動き始めている。

DAY3

ポスターは見た目のインパクト勝負と、力が入る

“編集～ポスターづくり”

完成間近！仕上げは時間との戦い

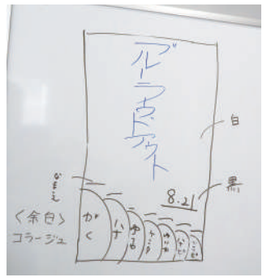
上映会の時間が決まっているため、編集作業は時間との戦い。しかも、編集機材１台を回しながら作業するため、時間もかかる。中には撮影が終わってホッとし、スイッチがオフになってしまう子も。

その一方で、編集のつなぎ方次第で映像、物語のテンポが上がり、全く違った印象になることに関心を寄せる子も多かった。やはりYouTubeやTikTokなど、動画編集が身近にある世代だからなのだろう。編集アプリを実際に使っている子どもたちも多く、編集のコツとその効果を教えるだけで、どんどん自分のものにしていく。

明らかに今の中高生世代にとって編集はハードルの低い作業のようだ。作品が出来上がる過程を楽しめると、モチベーションも高い。

編集作業の傍ら、ポスターづくりにも着手。映画は観客に観てもらって、初めて完成となる。ポスターなどの宣材で作品の印象も変わるだけに、ポスターは映画づくりにおいて最も重要な過程の一つ。ある意味、最後の仕上げと言っていいだろう。

タイトルを決め、どんな構図にするのかを話し合い、子どもたちで写真を用意したり、デコレーションしたり、準備に奔走。その共同作業は文化祭準備を彷彿とさせた。作品、ポスターが完成したのは、ともに上映会ぎりぎりの15分前だった。



▶タイトルもポスターもチームの個性が際立つ。まさに世界に一つしかない、４日間の結晶

▶「もうちょっと時間が欲しかった」「編集しなおしたらまた違う印象の作品ができたかも」と、とにかく編集作業は時間との戦いだった。だが、子どもたちは自分たちの手で作品を完成させている実感もあり、熱心に映像をつないでいく

DAY 4

“上映発表会”

映し出される「自分たちの映画」
期待と緊張に胸が高まる

激動の4日間を終えた達成感 双葉町に笑顔があふれる

最終日。緊張が途切れることのなかった4日間を締めくくる上映発表会が14時からスタート。そのぎりぎりまで撮影、編集、ポスターづくりに追われた子どもたちだったが、その表情は明るく、疲れを全く感じさせない。むしろ最後の最後まで、満足のいく作品に仕上げようと、大人たちスタッフを盛り立てる。その真剣なまなざしは、初めての顔合わせとなった3日前のオリエンテーションとは全く別人のものだった。

会場はその成果を見ようと、関係者、保護者ほか、一般客、マスコミでいっぱいに。同じく双葉町で撮影された東邦学園映画専門学校、東京藝術大学大学院の生徒たちによる作品の上映会が行われたのも、子どもたちにとって刺激になったことだろう。

そして、いよいよ上映発表会がスタート。各チームのリーダーでさえ、この上映会で初めて完成品を観るという。会場にいる誰もが固唾をのんで鑑賞。映し出されたドラマに盛大な拍手が贈られた。

上映後は舞台上に登壇し、作品への想いを語った。その姿にはやりきった充実感が見える。発表会終了後も興奮冷めやらず。記念撮影をしたり、LINE交換をしたり、時間ギリギリまで激動の4日間を共に過ごした仲間との別れを惜しんだ。彼らにとっても記憶に残る体験になったことだろう。

参加者の声

「個性いっぱいのメンバーでつくった、こだわりの映画。演技する二人をみんなでフォローしました」（Cチーム／東京都・高1 小原里彩子）

「大好きな双葉町を大好きな仲間たちと撮れて最高良かった！」（Aチーム／茨城県・高2 橋本岳）

「阿部（紗椋）ちゃんがギターを持ってきたのが始まり。最初は恋愛映画にしようと思ったのだけど、みんな経験がないので家族の物語になりました（笑）」（Cチーム／石川県・高3 大薮桃子）

「初めて会ったみんなで、協力し合ってつくった凄い映画」（Aチーム／神奈川県・中2 島田悠也）

「やりたいことを詰め込み、アングルにもこだわりました」（Bチーム／千葉県・高2 荻島諒介）

「最高の思い出ができました。かわいらしさの中にある怖い部分を出したく、もこもこしたかわいいウサギのぬいぐるみに風船とアイスピックをもたせました」（Bチーム／大阪府・高3 佐野亮華）

「ラストシーンは雨が降ってきて中断。最後の1カットを諦めかけましたが、車の中で粘ってよかった」（Cチーム／大阪府・中2 川原菜摘）

「撮影している皆さんの姿を見て、ぜひとも檄を飛ばしたいと、待っていました。皆さん、いい経験していますね！」（双葉町パトロール中の駐在員）

「子どもたちがいるだけで、町が生き返った気がします。関心をもっていただいて嬉しい。どんな印象を持ち、双葉町をどう映されたのか楽しみです」（双葉町旧駅舎コミュニティスペース職員）

「双葉町に住んでいた子どもたちが避難した町で暮らし始めて10年強。作品に登場する子どもたちが関西弁で会話しているのがリアルでした」（双葉町役場勤務の職員）

「今の中高生には東日本大震災の記憶がないんだという実感がわきました。Bチームの作品は被災地と意識せず、好きなものをフラットに撮っているのが新鮮でした」（福島県浪江町住民）

Aチーム

「ブルーラウドアウト」

制作：三輪結香、小川はな、島田悠也、本多そら、豊田健太、橋本岳、宮本花南　サポートスタッフ：永田琴、板野侑衣子、園田真子、ニノ戸新太、蒔野まりん

STORY
偶然にも時を同じくして双葉町へとやって来た7人の子どもたち。心に不安や不満を抱えた彼らは町を巡りやがて海へと辿りつく。それぞれが溜め込んでいた思いの丈を力いっぱい海に叫んだ後、彼らには笑顔が戻っていた。

Bチーム

「あっぱれ青春ハッピーエンド！ ～俺達は全員不幸にならない～」

制作：今村優来、柴野晃太朗、足立珠子、葛西藤男、中澤莉胡、荻島諒介、佐野亮華　サポートスタッフ：市井昌秀、金子由里奈、久保朝香、片嶺穂乃佳、二宮絵梨香

STORY
双葉町で撮影中の「あっぱれ青春ハッピーエンド！ ～俺達は全員不幸にならない～」は海のシーンをもって無事にクランクアップを迎える。出演者・スタッフ一同が喜ぶ中、「映画の神」も祝福のクラリネットを奏でる。

Cチーム

「パパの音」

制作：阿部紗椋、川原菜摘、下松谷嘉音、伊藤滉介、小原里彩子、大薮桃子、鎌田七都　サポートスタッフ：吉田康弘、東盛あいか、片山蓮、川合真世、井上遥

STORY
双葉町の海に佇む嘉音となつみ兄妹。ギターを弾けないなつみが持ってきた父の形見のギターケースの中には、父からの手紙が入っていた。ギターを手に取り弾き始める嘉音。それは時を越えて紡がれる家族の音だった。

本部スタッフ　三谷一夫、曹 明実、新実えみ、向田 優、北林佑基、武村敏弘、松野 泉、渡邉拓斗、阿部直樹、物部和美、丸山京介、野村翔流、岡﨑優子、稲越一之、星野晃志、三浦理高

Fukushima Hamadori Cinema Project 2022

経済産業省

福島浜通り映像・芸術文化プロジェクト事務局　TEL：03-3581-9740

映画24区

地域プロデュース事務局　TEL：03-6264-3880

公式 HP：fukushima-cinemaproject.jp